

第 71 回クラシックを楽しむ会

2020 年 1 月 19 日 (日) 18:00~ (2 時間 30 分、休憩除く)

タイトル：**喜歌劇「こうもり」(ヨハン・シュトラウス 2 世)**

会場等：バイエルン国立歌劇場
(1986 年 12 月)

楽団等：バイエルン国立管弦楽団
バイエルン国立歌劇場合唱団
バイエルン国立歌劇場バレエ団

指揮：カルロス・クライバー

演出：オットー・シェンク

出演：エーベルハルト・ヴェヒター
(アイゼンシュタイン)

パメラ・コバーン (ロザリンデ)

ジャネット・ペリー (アデーレ)

ブリギッテ・ファスベンダー (オルロフスキー公爵)

ヨーゼフ・ホプファーヴィーザー (アルフレート)

ヴォルフガング・ブレンデル (ファルケ博士)

ベンノ・クッシュェ (刑務所長フランク)

その他



第 2 幕 伯爵夫人を誘惑しようとして小道具の懐中時計を奪われる主人公

簡単なあらすじ

倦怠期を迎えたアイゼンシュタインとロザリンデ夫妻の、夫アイゼンシュタインが刑務所に出頭しようとしているところに、友人のファルケ博士が訪れて、オルロフスキー公爵の夜会へ誘う。妻ロザリンデの元恋人アルフレードがやってきてロザリンデを口説き始める。そこに刑務所長のフランクが現れ、アルフレードをアイゼンシュタインと思い込んで、連行する……。すべては「こうもり博士」とあだ名をつけられて笑いものにされたファルケが、アイゼンシュタインに復讐するために仕組んだ茶番劇。

見どころ・聴きどころ

第 1 幕。ロザリンデが夫の刑務所行きを嘆き悲しむ。建前の愁いを込めた三拍子から本音の浮き浮きした二拍子に。夫は浮き浮きと夜会に出かけ、妻は元カレと逢瀬を楽しもうとしているとき……。

第 2 幕。それぞれ仮装して夜会に集まる。ロザリンデのチャールダーシュ、ポルカ「雷鳴と電光」で宴会は最高潮、最後は「こうもりのワルツ」。

第 3 幕。実は昨夜の舞踏会はファルケが計画した茶番劇「こうもりの復讐」だったと明かされる。過ちはすべてシャンパンのせい、皆は敵味方の隔てなく兄弟姉妹になろうと陽気に歌って幕となる。

第 72 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：**喜歌劇「天国と地獄」(オッフェンバック)**

2 月 16 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

ザルツブルク音楽祭 2019。エンリケ・マツォーラ指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団。アンネ・ゾフィー・フォン・オッター他出演。ギリシャ神話の神聖な物語をパロディー化。フレンチ・カンカンのギャロップは運動会でのおなじみ。

3 月以降、ミラノ・スカラ座 2019/20 開幕公演 歌劇「トスカ」、バイロイト音楽祭 2019 歌劇「タンホイザー」、ザルツブルク音楽祭 2018 年 8 月の歌劇「スペードの女王」、ザルツブルク音楽祭 2014 年 8 月の歌劇「ドン・ジョヴァンニ」などを予定。

あらすじ

【時と場所】

「こうもり」が作曲された 1874 年当時のウィーン郊外温泉地

【登場人物】

| | |
|--------------------|---|
| アイゼンシュタイン (T / Br) | 裕福な銀行家。刑務所に入る前に憂さ晴らしをと夜会へ |
| ロザリンデ (S) | アイゼンシュタインの妻。夫の浮気を見定めるため夜会へ |
| アデーレ (S) | ロザリンデの小間使い。女優を夢見て夜会へ |
| イーダ (S) | アデーレの姉 |
| オルロフスキー公爵 (Ms/T) | ロシアの貴族で遊び人。夜会を主催 |
| アルフレート (T) | 声楽教師でロザリンデの昔の恋人。アイゼンシュタイン男爵の身代わりにされて刑務所に |
| ファルケ博士 (Br) | アイゼンシュタインの友人。アイゼンシュタイン男爵が原因で「こうもり博士」とあだ名され復讐を計画 夜会に出席してフランスの騎士に成りすます |
| 刑務所長フランク (B / Bs) | |

【第 1 幕】新興の裕福な銀行家アイゼンシュタイン邸の一室

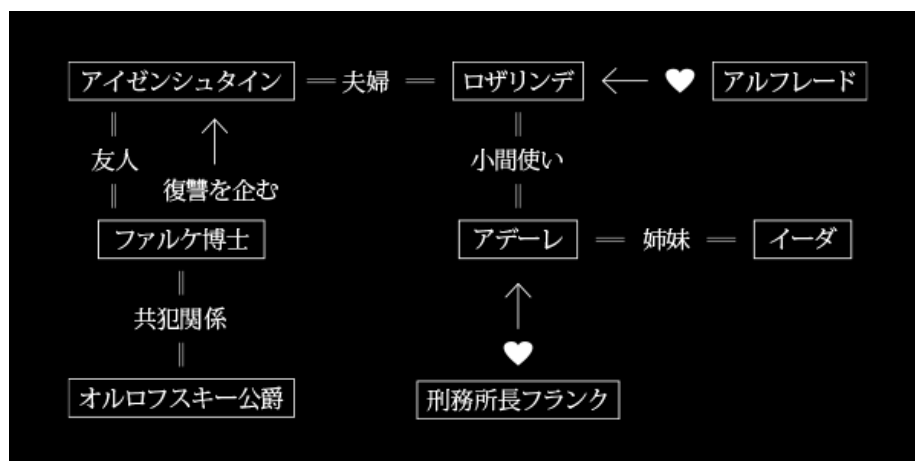
アイゼンシュタインは公務執行妨害の罪で収監されることになりいら立っている。友人ファルケが現れ、収監前の気晴らしにとオルロフスキー公爵邸の夜会へ誘う。一方、小間使いアデーレも姉イーダから夜会に誘われていて、どうにかして出かけるため「重病の叔母を見舞うため休みがほしい」とひと芝居打つ。アイゼンシュタインの妻ロザリンデは夫の不在を寂しがるが、その間に昔憧れたテノール歌手アルフレートと情事を楽しもうと企んでいる。アイゼンシュタインとファルケが出かけ、代わりにアルフレートが入ってくる。ロザリンデはさっそくアルフレートと楽しもうとしたとき刑務所長フランクが訪ねてくる。主人気取りでくつろいでいるアルフレートをアイゼンシュタインと勘違いして連行する。

【第 2 幕】ロシアの大貴族で退屈している遊び人オルロフスキー公爵邸の大広間

オルロフスキー公爵の夜会。アイゼンシュタインとフランクが鉢合わせするが、お互いフランスの貴族だと自己紹介して意気投合する。ロザリンデのドレスを無断で拝借したアデーレは、女優になりすまして登場。ロザリンデは仮面をつけたハンガリーの貴婦人に扮してやってくる。この貴婦人が自分の妻だと気づかないアイゼンシュタインが口説こうとするが、口説き道具の懐中時計を彼女に奪われてしまう。宴もたけなわのなか、朝 6 時の収監の時間になり、アイゼンシュタインとフランクは慌てて出ていく。

【第 3 幕】刑務所内

刑務所に帰ってきたフランクは夜会の余韻に浸っている。アイゼンシュタインが刑務所に出頭すると、フランクがいるので驚く。お互い正体を明かすが、アイゼンシュタインはすでに収監されていると聞いて驚き怒る。そこにロザリンデがやってきたので、アイゼンシュタインは妻の不貞を責めるが、彼女は例の懐中時計を取り出す。ここでファルケが、すべては自分が仕組んだ "こうもりの復讐" だったと種明かしして、茶番劇はにぎやかに幕となる。



出演



E.ヴェヒター
(アイゼンシュタイン)



P.コバーン
(ロザリンデ)



J.ペリー
(アデーレ)



B.ファスベンダー
(オルロフスキー)



W.ブレンデル
(ファルケ)



C.クライバー



O.シェンク

エーベルハルト・ヴェヒター (1929 - 1992) は、オーストリア・ウィーン生まれのバス・バリトン歌手。ウィーン国立歌劇場の 100 周年記念切手にドン・ジョヴァンニ役で描かれ、オーストリア政府から宮廷歌手の称号を贈られた。心臓発作で急逝するまでウィーン・フォルクスオーパーとウィーン国立歌劇場の総監督を務めた。

パメラ・コバーン (1955 -) はアメリカ、オハイオ州出身のソプラノ歌手。1982 年バイエルン国立歌劇場でクライバー指揮「こうもり」のロザリンデ役で大成功を収めた後、世界の主要歌劇場で活躍、名だたる名指揮者との公演はいずれも高い評価を得ている。

ジャネット・ペリー (1947 -) は、アメリカ・ミネソタ州ミネアポリス生まれのソプラノ歌手。ヨーロッパの主要歌劇場および主要音楽祭に出演。ヘルベルト・フォン・カラヤンお気に入りの歌手で、名だたる名指揮者のもとで歌った。

ブリギッテ・ファスベンダー (1939 -) は、ドイツ・ベルリン出身のメゾソプラノ歌手。名バリトン歌手の父から声楽を学んだ。欧米の主要歌劇場に出演、ズボン役で有名。歌手引退後は各地の歌劇場で演出家、音楽監督として活躍した。

ヴォルフガング・ブレンデル (1947 -) は、ドイツ・ミュンヘン生まれのバリトン歌手。バイエルン国立歌劇場から最年少の 30 歳で宮廷歌手の称号を授与され、世界の主要歌劇場に出演した。ドイツ連邦共和国からは功労勲章を授与された。

ベンノ・クッシュェ (1916 - 2010) は、ドイツのバス・バリトン歌手。20 世紀ドイツ・オペラを代表するモーツァルトとワーグナーの最高の歌手の一人として、特にキャラクター歌手と喜劇役で賞賛された。

カルロス・クライバー (1930 - 2004) は、ドイツ出身の指揮者。バイエルン国立歌劇場の音楽監督だった世界的な名指揮者の父エーリヒ・クライバーがナチスと衝突したため一家でアルゼンチンに亡命した。1968 年バイエルン国立歌劇場指揮者として名声を確立した後、主に指揮したのはバイエルン国立歌劇場管弦楽団、ウィーン・フィル、ベルリン・フィルで、その他ウィーン国立歌劇場、ミラノスカラ座など世界の主要歌劇場やオーケストラでも指揮したが、次にどこで指揮するかは世界的なニュースになった。「キャンセル魔」の異名をもつクライバーが日本には(破格のギャラで!)4 回訪れているが、それ以外にも度々お忍びで来日している。なお、クライバーが指揮した「こうもり」の公演はすべてバイエルン国立歌劇場であり、ウィーン・フィルとはニューイヤー・コンサートで序曲を演奏しただけである。

オットー・シェンク (1930 -) は、オーストリア・ウィーン生まれの俳優・コメディアン、演劇およびオペラの演出家である。ヨーロッパの主要歌劇場と契約を結び、モーツァルトからアルバン・ベルクなど現代作曲家までの多くの作品を演出した。特にメトロポリタン歌劇場の豪華で伝統的かつリアリスティックな舞台は有名で、その中でもワーグナーの「ニーベルングの指輪」は、伝統を重んじるワーグナーのオペラファンから喝采を受けた。

参考

「こうもり」作曲の経緯

「こうもり」のもともとの原作はドイツの喜劇。オッフェンバックの喜歌劇を手掛けたメイヤック等がパリを舞台にしたヴォードヴィルに仕立て、シュトラウスの協力者ジュネー等がこれをドイツ語に翻案して舞台をウィーンに移した。

「こうもり」の登場人物と 19 世紀後半の時代

アイゼンシュタインはドイツ語で「鉄の石」。「普墺戦争」(1866 年)でオーストリア帝国を破ったプロシヤの鉄血宰相ビスマルクを連想させる。**ファルケ**はドイツ語で鷹。落日のハプスブルグ家紋章の双頭の鷲を連想させる。プロシヤに大敗したオーストリアは帝国内諸民族「妥協」のオーストリア＝ハンガリー二重帝国を成立(1867 年)させたことから、ハンガリー文化の影響を受けることになった。**ロザリンデ**はウィーンワルツを歌い、ハンガリー貴婦人に扮してチャールダシュを歌う。これに対して小間使い**アデーレ**は(自治のほとんど認められなかったチェコの)ポルカを歌い、女優に扮してワルツを歌う。**オルロフスキー公爵**のロシアはバルカン半島を巡ってオーストリアと対立中。

「普墺戦争」前後のウィーンとワルツ王ヨハン・シュトラウス

ウィーンの男声合唱協会のメンバーが、飢えて凍えて暖もとれないほど困窮した市民を励まそうと、ワルツ王ヨハン・シュトラウスに合唱曲の作曲を依頼して、名曲**美しく青きドナウ**が生まれた。歌詞は協会のメンバーが作詞した。「踊れ! 踊れ! どんなに恐ろしい状況でも踊れ、踊れば恐ろしい運命も忘れられる」。1867 年当時のウィーン市民には「踊る」ことしかできない時代だった。なお、当時のドナウは美しくもなく、青くもなかったが、後に現在の歌詞が付けられた。

フランツ・ヨーゼフ 1 世は、ウィーンの人口が倍増して住む家のない人々であふれていたため、城壁を撤去して大規模な都市計画による改造を進めた。続けてウィーン万博を成功させようと建設ラッシュで空前の好景気に沸き文化も爛熟することになった。1873 年、ウィーンでコレラが発生し、万博が始まるとすぐにバブルがはじけ、株は大暴落し多くの自殺者がでていたなかで、喜歌劇**「こうもり」**が作曲された。

「こうもり」の独唱曲「クープレ」について

オペラの独唱曲は通常「アリア」であるが、この喜歌劇「こうもり」の独唱曲ではほとんど「クープレ」。音楽用語「クープレ」は「ロンド形式」のなかで使われるが、「こうもり」の「クープレ」は英語の「カップル」と同じ語源で、歌詞が二行連句(対句)の意味。歌詞の行ごと、または一行おきに脚韻を踏む。第 2 幕でオルロフスキーの歌う奇妙な旋律のクープレ**「僕はお客を招くのが好きで」**の最初の 4 行を原詩と訳で示す。

Ich lade gern mir Gäste ein,(アイン)
man lebt bei mir recht fein,(ファイン)
man unterhält sich wie man mag,(マーク)
oft bis zum hellen Tag.(ターク)

私は、客を好んで招待する。
私と共に過ごすのはとても素晴らしい。
人々は望みどおりに談笑する
しばしば明るくなるまで。

上記の他、アデーレが第 2 幕で歌うクープレ**「公爵様、あなたほどのお方なら」**、同じく第 3 幕で歌うクープレ**「田舎娘に扮するとき」**はともにコロラトゥーラ技法をちりばめた名曲である。